

映画「プロミスト・ランド～サーファーたちが見たイスラエル」
小冊子「聖書で学ぶ『約束の地』」 トッド・モアヘッド著

はじめに

映画「プロミスト・ランド～サーファーが見たイスラエル」 70分

美しいイスラエルの海と自然を背景に、米国のクリスチャンサーファーと、イスラエル人サーファーたち、そしてアラブ人サーファーが交流する。

名サーファーとして世界的に知られるトム・カレン氏のイスラエル訪問も紹介される。彼らはテルアビブでサーフィンを楽しんだ後、エルサレムとガリラヤを訪れる。

最後はみんなで「過越の祭り」を祝う。

小冊子「聖書で学ぶ『約束の地』」：この映画のスタディガイドとして制作された。

なぜ、イスラエルの地は「約束の地」なのか。

聖書はイスラエルについて何を語っているのか。

なぜ、イスラエルが重要なのか。

このような疑問を、わかりやすく学べるように構成されている。

イスラエル民族は、神がご自身の民として選び、またご自身の「瞳」と呼んで愛しておられる民である。彼らについて、クリスチャンが知っておくべきことが、この小冊子には簡潔にまとめられている。

これまで多くのキリスト教会で誤って教えられてきたことは、次のこと

教会は「霊的なイスラエル」である。

イスラエル民族は、神の選びの民としての使命に失敗した。

その地位は、教会が引き継いだ。

よって、旧約聖書に約束された祝福は、現代ではイスラエル民族ではなく、教会のもの。

みやま集会では、教会がこのような誤った教えにそれていったのは、どういう経緯だったのか、という質問が出ました。

そこで、この映画と小冊子を通して、この疑問について学ぶことにしました。

学びは3回シリーズで、第1回の前回は映画を視聴しました。

第2回と第3回は、この小冊子の中から、第2章「神のご計画と現代イスラエル」と第5章「教会はどこで間違ったのか」を取り上げて、学びます。

本日は、第2回「神のご計画と現代イスラエル」です。本論に入るまえに、そもそも「イスラエル」とは誰を指すのか、小冊子の中から第1章「イスラエルとは誰か」という部分の説明も見てから、現代イスラエルが神のご計画の中でどういう位置にあるのか、を学びます。

なお、この小冊子の聖書解説では、フルクテンバウム博士の論文からの引用も多数です。

神のご計画と現代イスラエル

神は、イスラエル民族を退けてはおられない（ロマ 11：1）

1. イスラエル民族とは

- (1) ひと言で言うと、「アブラハム→イサク→ヤコブ（イスラエル）の子孫」
- (2) 神との契約関係が重要。全人類は、アダム契約とノア契約の中にある。全人類の中で、アダム契約とノア契約に加えて、アブラハム契約の中にもあるのが、イスラエル民族。
- (3) アブラハム契約とは：神は、ひとりの人を選び、彼と契約を結んだ。
 - ① 創 12：1～3（アブラム 75 歳）
 - ② 創 12：7
 - ③ 創 13：14～17
 - ④ 創 15：1～21
 - 15：6「彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」
 - 15：12～16 子孫が他国で 400 年間奴隷となる預言
 - 15：17～18「煙の立つかまど、燃えているたいまつが、あの切り裂かれたものの間を通り過ぎた。その日、主はアブラムと契約を結んで仰せられた」・・・血の契約。裂かれたものの間を通り、契約を破ったらこのように自分も裂かれて血を流すことになることを確認する。ここでは、アブラムは通っていない。シャカイナ・グローリー【神の臨在を示す現象】だけが通った。この契約は、神の側のみが実行責任を負う契約である。
 - ⑤ 創 17：1～8（神からアブラハムの名をいただく）
 - ⑥ 創 22：15～18（アブラハム 130～137 歳、イサク 30～37 歳）
- (4) 3つの約束：この契約の中で、3つの約束がアブラハムに与えられた
 - ① 土地の約束
 - あなたの子孫に、この地を与える（12：7）
 - あなたとあなたの子孫にこの地を与える（17：8） →復活を示す
 - ② 子孫の約束
 - あなたを大いなる国民とする（12：1）
 - あなたの子孫は、地のちり（13：16）、天の星（15：5）のように数えきれなくなる
 - ③ 祝福の約束
 - 地上のすべての諸族はあなたによって祝福される（12：3）
 - あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受ける（22：18）
- (5) 無条件契約
 - ① これらの約束を実行する義務を負うは神の側
 - ② それを受け取るためにアブラハムの側には何の義務も条件もない

- ③ このような契約を、片務契約（片一方にだけ義務がある契約）あるいは無条件契約（約束のものを受け取る側には、何の条件もない契約）という
- (6) アブラハムの子のうち、イサクが、アブラハム契約を継承した（創 17 : 19～21、26 : 2～5、26 : 24）
- (7) イサクの子のうち、ヤコブが、アブラハム契約を継承した（創 28 : 10～15）
- ① 神は、ヤコブに「イスラエル」という名を与えた（創 32 : 24～30）
- ② ヤコブ＝イスラエルからは、12 人の息子たちが生まれた。
- ③ 彼らがエジプトに寄留している 430 年間で、壮年男子だけで約 60 万人の人口となった（出 12 : 37）。彼らは、12 人の息子たちの名を付けた 12 の部族から構成される、ひとつの民族となった。彼らをイスラエル民族という。
- (8) アブラハム契約は、イスラエル民族全体に継承された（出 2 : 24～25）。その意味で、イスラエル民族は、神に選ばれた民であり、神に愛される民、神の「ひとみ」（ゼカ 2 : 8）である。しかし、選民＝立派な民 ではない。
- ① 申 7 : 6～8
- ② 申 9 : 6
- (9) 私たち信者が選ばれ、愛されるのも、私たちが立派だからではない。立派ではない者を選んで、完全な者とする、これが神のご計画である。
- ① I コリ 1 : 26～31
- ② II コリ 12 : 8～10
- (10) イスラエル民族の最大の使命は、メシアをこの地上にもたす民となることである。
- ① イエスは、イスラエル人（ロマ 9 : 4～5）
- ② イエスは、アブラハムの子孫。イスラエルのメシアであり、この世界の救い主である（創 22 : 18、ガラ 3 : 14～16）
- (11) 「ユダヤ人」の意味は？：イスラエル民族に属する人、イスラエル人と同じである。後年、南王国ユダがあった地域がユダヤと呼ばれるようになり、それ以降、イスラエル民族をユダヤ人と呼ぶことが通例となった。イエスはユダヤ人であった
- ① マリヤの系図と創 49 : 10（イスラエルの王は、ユダ族から出る）
- ② 救いはユダヤ人から出る（ヨハ 4 : 22）
- (12) イスラエル人＝ユダヤ人。中東のイスラエルの国土に住む人だけではない。国土の外に住む人たち（ディアスポラ）も含まれる。
2. レムナント＝イスラエルの残れる者
- (1) 神の選びの民イスラエル。しかし現状は、イエスをメシアとして信じるユダヤ人は、ユダヤ人人口の中のわずか 1%。その他の大半のユダヤ人は、無神論、不可知論。また、パリサイ派の流れをくむラビ（師）を中心とした現代ユダヤ教に従う人々もいる。今でも、彼らは神の民イスラエルなのか？
- (2) 聖書は、「イスラエルの残れる者（レムナント）」という重要な概念を教えている。
- ① I 列 19 : 14 預言者エリヤの落胆「ただ私だけが残りました」

- ② I列 19:18 神のお答え「イスラエルの中に七千人を残しておく」
- (3) (アーノルド・フルクテンバウム博士)「ユダヤ人全体の中には、いつの時代も信仰ある者が必ずいる。その人々を『イスラエルの残れる者(レムナント)』という。つまり、全体としてのイスラエルと、残れる者としてのイスラエルと、二種類のイスラエルがある。両者は、民族的には同一だが、霊的には異なる。過去の歴史において、人数の多少はあったとしても、レムナントがいなかったことは決してない。」
- (4) ロマ 9:6 「イスラエルから出る者がみな、イスラエルなのではない」
- ① 【全体としての】イスラエルから出る者がみな、【残れる者としての】イスラエルなのではない。
- ② 二種類のイスラエルがいることを教えている。
- (5) ロマ 9:27 「たとい、イスラエルの子どもたちの数は、海べの砂のようであっても、救われるのは残された者である」
- ① 「イスラエルの子どもたち、海べの砂のように(多い)」=全体としてのイスラエル
- ② 「救われるのは残された者である」=残れる者としてのイスラエル
- (6) ロマ 11:5 「今も、恵みの選びによって残された者がいます」
- ① 「今」は、パウロが宣教していた時代。ローマ人への手紙が書かれた頃。
- ② イエスをメシアとして信じるユダヤ人たちが、「今」の時代のレムナント
- ③ このことは、教会の携挙まで続く。
- ④ 大患難期前半期では、エルサレムで活動する二人の証人、全世界で福音宣教をする14万4千人、彼らはみなユダヤ人であり、その時代のレムナントである。
- ⑤ 大患難期後半期では、反キリストに従わずにイスラエルの国土を出てボツラに退避するユダヤ人たち、離散の地でそれぞれ反キリストの統治に従わずにいるユダヤ人たちが、その時代のレムナントである。その数は大患難期に入ったときのユダヤ人の総数の3分の1、彼らは末期の3日間でイエスをメシアとして認めて全員が救われる。
3. 現代イスラエル
- (1) イスラエル民族の世界離散は、預言されていた(申 30:3)
- (2) しかし、どんなにイスラエル民族が神に不従順であっても、神はアブラハム契約の3つの約束を必ず成就してくださる。なぜなら、アブラハム契約は無条件契約であり、神は契約を絶対に破らない、真実なお方である(ロマ 11:28~29)
- (3) 聖書は、イスラエル民族が離散の地から、約束の地に帰還することも預言している。聖書の帰還預言には、1回目と2回目がある。
- ① 1回目は不信仰な状態での帰還。これは、メシアの再臨に備えるためである(エゼ 20:33~38)
- 「むちの下を通らせ」=大患難期を通る
 - 「あなたがたと契約を結び」=イスラエルの残れる者たちはみな救われて、神との「新しい契約」の関係に入る。

- ② メシアの再臨の条件は、イスラエルの民がメシアを信じ救われて、メシアに帰ってきてくださいと祈ること。そのとき地上は、反キリストが世界を支配する大患難期の末期。レムナントのうち、イスラエルの国土にいた者たちは、ボツラ（ペトラ）に退避している。国外にいる者たちはそれぞれの場所にいる。ボツラにいる者も、国外にいる者も、皆がイスラエルのメシアとしてイエスを認めるとき、「イスラエルはみな救われる」という預言が成就する。
- ③ 救われたレムナントたちが、ボツラから、そして世界各地から帰還するのが、2回目、信仰ある状態での帰還である（イザヤ 11：11～12）
 - 「再び」：原文では、「再び、2回目」。明確に2回目と預言されている。
- ④ 2回目の帰還の後、イスラエルは神と「新しい契約」関係に入る（エレ 31：31～34）。この「新しい契約」とは、古い契約、すなわち「モーセの律法」に対して新しい契約である。神の律法は石の板ではなく、イスラエルの民一人ひとりの心に記され、誰一人罪を犯す者はいない。
- (4) 第1回目の世界規模での帰還＝不信仰な状態での帰還は、いつから起きているのか？ 1839年から始まり、現在も続いている。
- (5) この間に、中東戦争が何度も起きたが、イスラエル国家は消滅していない。
 - ① 1947年国連決議 イスラエル受諾、アラブ拒否
 - ② 1948年5月14日 独立宣言→北からレバノンとシリア、東からイラクとトランスヨルダン、南からエジプトが侵攻 → 第1次中東戦争(1948～49年)。イスラエルは奇跡的に勝利する。
 - ③ 第2次中東戦争(1956年)、別名はスエズ危機
 - ④ 第3次中東戦争(1967年)、別名は6日戦争
 - ⑤ 第4次中東戦争(1973年)、別名は10月戦争。ラマダン戦争(アラブ側呼称)あるいはヨム・キップール戦争(イスラエル側呼称)とも呼ばれる。
 - ⑥ 現在の中東和平の主要な課題は、1967年の戦争でイスラエルが占領したゴラン高原とヨルダン川西岸地区をめぐる交渉。この戦争でイスラエルはシナイ半島とガザ地区も占領したが、シナイ半島はイスラエル・エジプト間に平和条約が締結された後に返還した。またガザ地区からは2005年に一方的に撤退した。